がん患者と家族に希望の光を与える情報誌

ライフライン21
がんの先進医療

2011 Mar. vol. 1

創刊記念特別企画　鼎談

武藤徹一郎 癌研有明病院名誉院長　土屋了介 癌研究会顧問　上 昌広 東京大学医科学研究所特任教授

21世紀のライフライン－がんの先進医療の現状と今後の課題

特集

重粒子線治療

国の肝いりで開発された重粒子線治療はどんながんに効くのか　普及型装置の第１号機が群馬大学で治療開始

陽子線治療

前立腺がんや鼻腔・副鼻腔がんに優れた治療効果　進行肝がんの予後を大幅に改善する陽子線治療

クリニック訪問

健康増進クリニック
水上治医師に訊く

がん患者の「悩み」に専門医が本音で答える
患者の価値観や希望を大切に行っていく医療

取材・文●宮西ナオ子　フリーライター

1カ月ごとに治療の評価を重ね、軌道修正を加えながら全力でサポート

「健康増進クリニック」は、JR市ヶ谷および地下鉄市ヶ谷駅から徒歩約1分のところにあります。

主として欧米からさまざまな健康情報を集め、予防医学を重視するとともに、最先端の西洋医学を大切にしながら、補完・代替医療を実践していくというスタンスをとっています。

特にがん治療に対しては、医学博士・米国公衆衛生学博士の水上治院長が丁寧なカウンセリングをして治療にあたっています。

「当クリニックで行っているのは統合医療です。つまり最新の西洋医学と、それを補完する非西洋医学とを組み合わせた患者さんの価値観や希望を大切にして行っていく医療です」というだけに、がん患者さんのカウンセリングには十分の時間をとります。初診で約1時間、再診でも30分は費やすといいます。

「患者さんの大切にしていることや、生き方、希望を持った闘病の仕方など、思いのたけを聞くことが大切ですし、統合医療には西洋医学単独の場合と違い、多くの選択肢があります。その選択肢をいかに組み合わせていくかということも、患者さんのニーズに合わせて考えていく必要があるのです」

水上医師は、数多い補完・代替医療のなかで、データがしっかりしていて信頼性の高いもの、有効な療法を厳選し、提供し、その治療のために戦略を練ります。

「患者さんのニーズを知ったうえで、その人に一番合っていると考えられる治療を組み合わせてからスタートし、1カ月ごとに評価を重ねます。治療がうまくいかなければ、軌道修正を加えながら、全力でサポートしていきます」

主に行っていることは、超高濃度ビタミンC点滴療法、全身温熱

「医療は今後『祈り』のレベルまで考えていく時代になるでしょう」と水上医師

東京都千代田区五番町のビル内にある「健康増進クリニック」（JR市ヶ谷駅から徒歩約1分）

クリニックの受付

待合室の棚には医療・健康関連の雑誌や健康食品などが並ぶ

超高濃度ビタミンC点滴を受けながらインタビューに応じる水上医師

療法、局所温熱療法、オゾン療法、ラドン療法、山元式新頭針療法、自律神経免疫療法、交流磁気シャワー、サプリメント療法、そしてライフスタイル指導、脳幹リラクセーションなどですが、水上医師が今、もっとも手ごたえを感じているのは「超高濃度ビタミンC点滴療法」と「温熱療法」です。

超高濃度ビタミンC点滴療法に確かな手応え

開業医だけにしかできない「最先端医療」が「超高濃度ビタミンC点滴療法」です。これはノーベル化学賞（1954年）とノーベル平和賞（1962年）の2つのノーベル賞を受賞した米国のライナス・ポーリング博士によって、40年前に提唱されたものです。

日本で広く取り入れられたのは、2007年10月に「点滴療法研究会」が設立されてから。

ビタミンCは「アスコルビン酸」とも呼ばれていますが、血管から大量に投与すると、細胞の周囲に過酸化水素が発生し、この過酸化水素ががん細胞を攻撃するために有用といわれます。というのも、がん細胞は過酸化水素に対して、とても脆弱だからです。また正常細胞は、過酸化水素の害を受けることがないために、超高濃度ビタミンC点滴療法は副作用もなく、患者さんのQOL（生活の質）を上げます。

「ビタミンC点滴療法は、他の抗がん剤の効果を抑えることはありません。むしろビタミンC療法を併用すれば、化学療法の副作用が軽減され、効果が高まる可能性を感じとっています」（水上医師）

もちろん予防医学的に取り入れることも可能です。

取材当日、水上医師は自らビタミンCの点滴を受けながらお話してくれました。

「自分自身で受けて、『これはよい』と思う治療法だからこそ患者さんにも自信を持って勧められます。私は、この点滴を1週間に1度、約1時間半受けることによって、激務に耐えて仕事ができているのだと思いますよ」

温熱療法―ハイパーサーミアと高周波温熱機器「インディバ」

もうひとつ、超高濃度ビタミンC点滴療法と併用して効果を感じているのが、温熱療法です。

温熱療法が特に注目されるようになったのは約50年前。1957年に米国とドイツで、がんの自然治癒例を集めた学会報告が出され、その症例の約3分の1に「高い発熱」が関係していたことがきっかけになりました。

その後、さらなる研究がなされ、細胞が温熱によるストレスを受けたときに生じる特殊なたんぱく質（HSP）が、次に生じる温熱ストレスから細胞を守り、体力を回復させたり、元気にしたり、痛みを軽減させたりする作用があるとされています。また免疫力も高まります。これは、温熱ストレスによって生じたHSPがNK（ナチュラルキラー）細胞を活性化したり、抗腫瘍作用を持つインターフェロンを体内で合成する量を増やしたりするからです。

「正常細胞は、血管組織がサーモスタットのような働きを持ってい

るため、42℃の温度まで耐えることができます。というのも、正常な組織では血管が拡張して血液が大量に流れ込むために温度がそれほど上昇しないのです。

しかし、がん組織のある細胞は毛細血管が十分に張りめぐらされていないために、常に酸性になっている傾向があります。酸性に傾けば傾くほど熱に弱くなるため、患部を温めると、酸性に傾いたがん細胞から先に死滅していくわけです。しかも、毛細血管が細くて少ないがん細胞は、血液によって熱を逃がす力が弱いため、正常な組織と比べ温度が上がりやすく下がりにくくなります。

そこで当クリニックで使っているのが、ハイパーサーミアとインディバです」

ハイパーサーミアではマイルド加温をして血流をよくし、体温を上げ、酸素を供給するという効果を期待します。

インディバとは、電気メスの発明者、スペインの物理学者ホセ・カルベット氏によって開発された電磁波エネルギーによる「高周波温熱機器」。電磁波エネルギーを利用して、人体の各組織にジュール熱（生体熱）を発生させます。

インディバの特徴は、身体の表面のみならず深部まで容量の多いエネルギーを透過し、各組織に安全レベルのジュール熱を容易に発生させることです。

診察室。水上医師は診療に際し、患者さんと正面から向き合って話すことを原則にしているという

温熱マシン（クリニックには同じマシンが２台設置されている）

体内に発生したジュール熱（生体熱）は、血流や細胞間を介して全身に広がり、身体の代謝を促します。その後、2～3時間後には、体外に放出されます。

21世紀の医療は医師主導から患者主導になる

「日進月歩の医療現場ですが、今、明らかに大きな変化が見られます。一番大きな違いは、20世紀までの医療は医師主導でしたが、21世紀からの医療は患者主導になりつつあることでしょう」と水上医師はいいます。

「今まで医師は、自分の価値観を患者さんに押し付けてきました。しかしこれからは患者さんが、自らの人生観、価値観、死生観を語り、それに合わせた医療を医師が提供していく必要があります。そのためには、医師と患者さんとの十分な話し合いが求められます。

それからもうひとつ、今後、考えていかねばならないのは、がん患者さんに対するメンタル・スピリチャルケアでしょう。今まで当院にはこの考え方が不十分であったと反省していますが、海外の公立病院には牧師さんがいます。キリスト教のみならず、日本人が入院すればお坊さんを呼んでくれたりもします。このように、これからは、その人の持っている宗教や信仰心を尊重して、医療も『祈り』のレベルまで考えていく時代になるでしょう」

さらに水上医師は、今後「医師と患者さんの信頼関係がますます求められる」といいます。そしてそのためには「賢い患者」になることが大切だとも。

2月中旬に出版された水上医師の著書『がん患者の悩みに専門医が本音で答える本』（草思社）では、医師とうまくコミュニケーションがとれるノウハウも網羅されているので必読です。

10年続いている健康増進クリニックの患者会では、毎月集会が持たれ、水上院長も「共にセミナー旅行で温泉に行ったり、音楽会などを開いている」そうです。

■健康増進クリニック
〒102-0076
東京都千代田区五番町 1-9
MG市ケ谷ビル5F
03-3237-1777
http://www.kenkou-zoushin.com/